

30年経っても思い出すのは

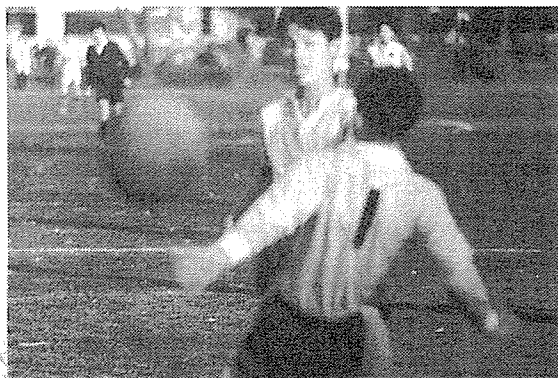
西高20期 赤澤 優

中学校を卒業した年（正確には年度ですが）、東京オリンピックで日本があつたアルゼンチンを破り、ブームにつられて入ったサッカー部。しかし、サッカーをやっていたお陰で、大学の学科対抗試合でも、会社の社内大会でも、息子が入っていたサッカークラブがきっかけでできた大人のチームでも、サッカーの試合に出ることによって、今日まで多くの友人ができ、話もはずみました。ある時は韓国の方とサッカーの話で打ち解けたこともありました。

さて、高校の時の試合を振り返ると、断片的にはいろいろ思い出しますが、2年生の時の国体予選と新人戦が強く印象に残っています。夏の国体予選では、当時都の二強の一角である城北高校（他の一角は帝京高校）に当たるまで勝ち進みました。殆ど自陣でやっていたように思いますが、1～2度得点のチャンスがありました。キャプテンから出た絶妙なパス、入っていれば…。私はフルバックで大変疲れたことと、並の選手では来ないような所に走り込まれて点を取られたことを覚えています。城北高校は試合後、都立高校相手に2点しかとれず、叱責されたという話が、まことしやかに伝わっています。

新人戦は、準決勝の対駒場高校戦が、事実上の決勝戦と言われ、それに勝って気がゆるんだとも思いませんが、決勝で深沢高校に0-1で負けてしまいました。試合は押していましたが、ハーフライン付近から蹴られたボールが山なりにゴールに。

1964年全国大会予選▶
準々決勝対小石川高戦
でベスト4入りを決め
た森谷(18期)のゴール



◀1964年全国大会予選
第3位表彰式後の記念
撮影

撮影：門前氏(17期)

「30年たったなら名キーパー」

西高20期 浅川 正健

「西のサッカー」これは私にとっては憧れの対象以外の何ものでもありませんでした。小学校の時から、香山晋・晃兄弟がいてどこであったために、どんな学校であるかを全く知らぬままに「西に行つてサッカーをやるんだ!」と言っていたような気がします。学区内の神明中に通い、勉強の成績は今一つでしたが、何とか西に滑り込んだ私は当然のようにサッカー部に入部しました。東京オリンピックのすぐ後だったために、人気の運動部で同期は33名でした。

押し入れの奥から33年前の日記が出てきました（その後、これ以外に日記というものを書いたことはありません）。

1965年4月14日（水）

2年生のサッカー部員に入部を告げると「今日から出られるか?」「明日からは出られますが…。最初のやりとりとしては最低だな!

初めて出た日、3年生は2、3人いた。丹羽さんにゴールキーパーを勧められ、初めは「やりたくありません」ちょっとしてから考え直し、「少し考えさせて下さい」と言ったら、「どうぞごゆっくり」だって。練習の終わり頃に、「こんなに背は低いけれどいいのならやらせて下さい!」と伝えたら、みんなとても喜んでくれたのでかえって困っちゃった。3年生のゴールキーパー、山田さんから柔軟とキャッチングを少し教えていただいた。（山田さんが練習に出てきたのは初日だけ）

けが：手首の捻挫、突き指、ひざの打撲、足の裏のまめ

感想：山崎兄弟のボールは今のところ怖い!

楽しいと言うより、厳しいスタートでした。ただキーパーがいなくて、ハンドボールで倒れ込みシュートを得意としていた私におはちが回ってきたのは、今ではラッキーだったと言えます。

4月22日（木）

初めての試合（数日目で試合とは酷である。でも精一杯やった：ふらふら）。結果は、3年 3-1 1・2年。3点ともとれない球ではなく、いる位置（ゴールとの角度）が悪く、3本ともセイビングしてかすったような気がするくらいだ。悔しい! 3年はさすがだ。2年も特に富田さんのバックスは安心して見ていられる。1年同士でもやったが様になっていない。

注意されたこと：

・エリア内で前進すること

- ・角度に注意
- ・ゴールキックは低くても遠く強く（気にせずたくさん蹴ってならせ！）
- ・声をかけろ

3年生の球も山崎兄弟たちの球も心を込めてとれば、そう怖くはない！

4月24日（土）快晴

学校に行ってもまだ足腰が痛い、遅刻すれすれ。昼食は1時、試合は2時から（食後の柔軟は苦しい）。前半の前半は硬直状態で動けず。

入部10日もたっていないのに日大鶴ヶ丘高と対校試合。ルールは知らない、ボールを持って歩き回る、コーナーキックで審判の見えない角度でパンツをつかまれ、振りほどこうとしたら、逆に審判に注意されてかっとなったり、散々でした。試合は0対2で負け。しかし、先輩にもほめられたし、気分のよい試合だった。富田さんと和泉さんの動きが特に目についた。試合終了後1年生の練習に加わった。

少しずつゴールキーパーの大変さ（ミスが許されない：フォワードやバックが空振りしても、ごめん！ですんじょうのが許せない思いの時期が結構ありました）、又おもしろさが見えてきました。仲間が去っていったり、試合に出れない悩みを持つ者、おでこをヘディングでパクッと切る者、足が靴ずれで血だらけ、記念祭の豊多摩との試合では修学旅行間際だというのに、半分以上が足がつって試合中にひっくり返る始末……3年間色々な思い出があります。

5月4日（火）

天気が良くて不機嫌（練習でくたくたに疲れているのに、5・6時限体育のあと杉並高校で試合）。杉並高校は2年3年、西は2年プラス小生1年のキーパー。結果は2対0と初勝利（嬉しい！）。初のPENALTY KICKも止めて完封。みんなでほめてくれた。

今日は初めて時間の感覚を気にしてみた。中村さんの動きはいい。本橋さんのファイトは見習うべき。1年の仲間の球速もかなりあがってきた。

けが：右膝内側打撲、珍しく手は快調

注意点：空いているところに走り込まれると、声をかけるつもりでも見落としがある。パスがまだ弱い。

5月13日（木）

小林さんが来て最後にキーパーリンチ。辛かったけど、終わったら気持ちがよかった。かなりうまくやれた。富永さんも来てくれた。

けが：過激突き指（10本）、手首捻挫、肘すりむき

5月20日（木） 雨

放射能雨の中で！ 中共が憎い。

5月22日（土）

明日は、いよいよ関東予選の1回戦。試験1週間前で辛い。今日は暑かった。後ろの水泳部が冷たい水で気持ちよさそうで憎らしかった。樋口さんと小安さんが見てくれた。小

安さんの球はすごく速くて、ぼろぼろやった。このところだいたいぶたるんでいたので、試合前日、小安さんに感謝しなくては。

フォーメーションの練習。どの試合の前日よりキックその他いいように思う。特に佐野さん、和泉さんが冴えている。明日の試合が大勝であることを祈る。

山崎兄弟はイギリスへ2年ほど行くそうだ。残念だが、まあしょうがない。

7月31日（土）晴

杉並高との練習試合。野々村さんの決まりそうなシュートが二本とも捨て身の反則プレイで相手に止められた。永網さんが両方ともPENALTY KICKを決めた。試合中珍しく弱気。キーパーにはあまり疲れない試合だった。キックと前に出るタイミングが悪い二つのミスがあった。でも2対0で完封勝ち。12試合で失点7。

見に来てくれた方：岡田先生、板沢先生、川上さん、小林さん（小）、森谷さん、橋本さん

商社に就職して3年目（1975年）、ロンドン駐在を言われた瞬間に、これでウェンブレイ・スタジアムに行けると思ったこと、ロンドンで最初に購入したのがサッカーボールとシューズだったことは今でもよく憶えています。又、当時の世界最高のサッカーの人気選手で、KEVIN KEEGANや英国の主将、TREVOR BROOKINGと会って、日本の土産物をあげたり、話せたのはいい思い出です。

「サッカーマガジン」は創刊号から読んでいたこと、日本リーグを見るために国立競技場にはよく行ったこと、「東西対抗戦」が夏にあり、第1回から3年ぐらい連続で観た記憶があること等々忘れられません。

又、1992年になって研修の仕事で松本育夫さんにお会いし、講演をお願いしたのですが、私にとっては1960年代から東洋工業、全日本で活躍されていたのをよく憶えていました。その燃える講演は新入社員から最高の評価でした。

何が言いたいのかな？要は、一度サッカーに触れると忘れられないことが山ほどあるのですが、それは決してサッカーのプレイだけではない、特に人間関係です。それは自らの誇りであり、支えなのです。へただったか、うまかったかも大事かもしれません。でも「西のサッカー仲間」これでしょうね。

だから、今でも仲間が集まると（昨年1月には同期16名中15名が集まりました：在校中から産婦人科医になると宣言していた岡宮、本当に実現させたのですよね、お産の仕事で急遽来れなくなったのだと信じています）、浅川は背が低くて、「上」に弱かった、短い足だが「股の下」をよく抜かれた、キックは飛ばなかったと、今でも文句を言われます。もう30年以上前の話ですよ。もう勘弁して！でも楽しいんですよ。こちらは自分で「名キーパー」と信じているのですから……。

都合のいい期間だけだとしても、1年のゴールキーパーで20試合、失点13点は立派なものだと30年前の日記を見ながら、子供たちに自慢しています。

現役の皆さん、2020年頃このような思い出ばなしを西のサッカー仲間とできるといいですね。

「シワちゃん来ない！」

西高21期 石川 順一

岡田先生をめぐっては、それぞれの年代ごとに限りなくたくさん逸話が語り伝えられてきたことだろう。私たち21期にとっても、忘れられないエピソードがいくつもある。

30年余りも前のことなので細かなことは忘れてしまったが、2年の春（1967年）のリーグ戦のときだったと思う。春の合宿でしごかれた私たちは、それなりに自信をもって都立大泉高校のグラウンドに乗り込んだ。相手がどこだったのか定かではないが、杉並高校か南葛飾高校ではなかったろうか。ともかく集合した私たちは、柔軟体操やダッシュでウォーミングアップし、ボールを回したりヘディングの練習をしながら、昂ぶってくるものを抑えかねていた。

私たちの前に行われている試合が、いよいよ後半に入ったとき、チームの誰ともなく言い始めた。

「シワちゃんいない」。

5、6組に分かれてボールを蹴っていた部員がいっせいに動きを止めた。ウォーミングアップでかいた汗が、気味悪く冷えていく。現在ではどうなのか知らないが、公式戦ではメンバーが8人以下のとき、部長の教員が同行しない場合は棄権・不戦敗と決められていた。試合開始前に岡田先生が現れなければ、苦しかった合宿などすべて無意味になるのだ。

どうしようとオロオロするもの、なにやっつんだシワちゃんはと怒り出すもの、呆然と立ち尽くすもの。そのときだ。マネージャーの井上進が「ちょっと待ってろ。練習してろよ、オレが迎えに行ってくるから」と、なんだか離れに暮らしているジイさんでも連れてくるように言って、どこかへ駆け出して行った。残された私たちは、絶望的な思いでむやみと走ったり、ボールを蹴ったりしていた。

もうあと5分で前の試合が終わるといころ、井上がグラウンドに駆け込んできた。「おおい、岡田先生が来て下さったぞ」と手を振りながら大声で叫んでいる。しかし先生の姿はどこにもない。見ると井上の後ろから、犬を連れて下駄履きのおじさんが走ってくる。井上はそのままリーグ戦を運営するテントへ、下駄履き、犬連れのおじさんと入っていく。

しばらくして、私たちの前に井上とおじさんがやってきた。「やあ、遅くなって」と下駄履きのおじさんが私たちに挨拶した。あっけにとられた私たちは、訳のわからないまま整列しておじさんに頭を下げたのである。

大泉高校を飛び出していった井上は、シワちゃんをあきらめ、犬を連れて近所を散歩していたおじさんに頼み込み、グラウンドへ引っ張ってきたのだ。やがて試合開始、スコアは忘れたが、我がチームは見事勝利を取めた。試合前半の半ばに登場した岡田先生は、試合後、下駄履きおじさんをはじめ、チームの誰彼にとなく「遅くなって申し訳なかったね」と謝っておられた。

見事に岡田部長に成りすましてくれた下駄履きおじさんも誰であったのか、今となってはわ

からない。アメリカへ渡ったままの井上に会えることがあったら、一度聞いてみたいと思っている。

22期でもっとも記憶に残ったあの大会

西高22期 千田 幸雄

22期は一匹狼的な性格の人が多い学年でした。それを一つにまとめたのがキャプテンの宇都宮でした。彼無くしては22期を語れないでしょう。その集大成が下記の都の新人戦で、見事（ブロック）優勝したことです（8ブロックあったと記憶しています。また中央大会が計画されていたようですが実施されませんでした）。

決勝戦は中大付属小金井との戦いで1-0（PK：千田）と勝ちましたが、その前の夏に練習試合で0-7の大敗を喫していました。この試合はディフェンス陣が中大付属の攻撃陣をすばらしいスライディングタックルで防ぎきり、後に中大付属の人から、「あの試合の後、スライディングの練習をたくさんやらされた。」ということを知ったほどの良い出来でした。

この新人戦のエピソードとしては準決勝戦（対都立久留米高：1-0で勝ち：FW中島の得点）で左サイドバックの天野がチーム初（唯一）のレッドカードで退場になり決勝に出られなかったことです。ハイボールに足を高く上げてイエローカード2枚目の退場でした。また、9月にユニフォームを新調し（茶色）、その最初の試合に桐朋高校（当時都ベスト4に入るほどの強いチームと記憶しています）との練習試合に勝って以来新人戦が終わるまで練習試合、公式戦とも負け知らずという、縁起の良いユニフォームを着ていたことも、記憶に残る点です。

以上は、50年誌用原稿を書くに当たり、22期福島、尾上、天野、千田の4人が久しぶりに集い、酒を酌み交わしながら思い出を語り合ったものをまとめたものです。

「思い出の2ゴール」

西高23期 遠藤 譲

あれは確か、春のリーグ戦だったか、一つ上の宇都宮先輩たちが身につけて勝った時と同じく茶色のユニフォームを着て、格上の中大付属とやった時の思い出が一番印象に残っています。試合の始めに相手が「イヤなユニホームだな」と言ったのを覚えています。前半0-1か0-2でリードされた後半の始まり、キックオフのボールを前へ蹴って、はねかえってきたのを思いきり蹴った所、折からの雨でぬれていたボールは、GKにまっすぐに飛んで、高いボールだったので、ファンブルしてラッキーな点を上げ、後半の半ばすぎ、CKのボールを相手がクリアミスして、私の目の前ではずみ、キーパーが出て来た所、頭の上をフワーと浮かせて2点目をとり、結局2-2で引き分けました。一試合2得点は後にも先にもこの時だけだったので、忘れられません。

西高サッカー部50年誌に寄せて

西高24期 井口 敬次

我々の期が小石混じりの埃っばい、あの殺伐とした西高グラウンドで球を追い回し、下手なスライディングをしては腰から太股にかけて血の滲み出たハンバーグを作っていた頃と言えば、アポロ計画の宇宙船で人類が初めて月面に着陸した映像を1年生の夏合宿で見た記憶とダブります。今思えば、アメリカの宇宙飛行士が月面にフットボールの球を持ち込みひと蹴りしたらさぞ遠くへ飛んだことでしょう。

当時のサッカーといえば、W-M（フォーメーション）だ、4-2-4（システム）だといった具合で、俺は前、お前は後ろ、俺は真ん中、お前は左・・・という具合に、グラウンド（今はピッチというらしい）に見えない縄を張ったようなシステムが横行しており、我等が期のチームでは、あの辺に蹴っ飛ばせばあいつかあいつがいるはずだから、多分次はこうなるだろう程度のレベルで（勿論同期で固めたチーム内にそれ相応の役割分担と信頼関係は築いていたのですが）サッカーをやっていたようにも思えます。

その後登場したオランダのヨハン・クライフに代表されるように流動的にポジション・チェンジを行う「トータル・サッカー」が出現したときは鮮烈な印象を受けたような気がします。個人的にはその後社会人としてほとんど球を蹴るような健康的なこともせず、世の中の流れと組織の中に埋没し20数年を経てきました。その間、高度経済成長、バブル崩壊を経験し、現在は世紀末の先の見えにくい時代における訳ですが、唯一今年の明るい話題といえば、ワールドカップ本選への初出場ではないでしょうか。

最近のサッカーのシステムについては詳しくありませんが、昔のサイドバックがウイングまでこなし、強烈なシュートを相手ゴールに突き刺し、一人か二人しかいないフォワードが前線から積極的に守備を行うなど、今のサッカーは見ていても楽しい。やればもっと楽しい。たかがサッカーとはいえ、主義主張も年齢も価値観も個性も違う連中が集まった一つのチームが、目的に向かってきっちりと機能するというのは素晴らしい。これはもはや芸術の域です。

勿論これには情報戦に代表されるようにチームをバックアップする高度なシステムが必要でしょうし、場合によってはくじによる資金集めも必要かもしれません。また、熱心なサポーターの声援がなくては選手は盛り上がりません。ちなみに、我等の期のチームが、練習試合でしたが、5対0の完封という最多得点での勝利を記録したのは、富士高戦でした（同じ学区の富士高は女子生徒の比率が高く、その文化祭に呼ばれ、少なくとも100人の観客がいたと記憶しています。ほとんどこのような舞い上がるような状況下での経験がなく、皆が偉く張り切っていたように記憶しています。）。人を動かす動機づけや士気高揚というのは、意外と単純なのかもしれません。

サッカーのシステムでも、世の中のシステムでも、試行錯誤はいつの時代も続くのでしょうが、出口のない迷路にはまり込まぬよう、明るい21世紀に移行したいものです。2002年には

日本でワールドカップが開催されます。せめて一試合位は同期の暇な連中が集まって観戦に行きたいと考えています。

ハーフ・タイムの頃

西高25期 福田 節

我等が、西高第25期サッカー部は、大型ディフェンダー、テクニック抜群のフォワードとその間を取り成す運動量豊富なミッドフィルダーを配した3バック・システムをとり、当時としては理想的なチーム・カラーをもっていた。但し、一期、一学年としてみれば11人が揃ったか、揃わなかったか位のメンバー数で、理想的なポジション構成をとりながらも、選手層が薄いという点が弱みではあった。その点に加え、運動量が豊富であることだけを自慢するキャプテンは、試合中に口数も豊富（口数；何やってんだヨ、持ち過ぎんナヨの連発）であったため、大型ディフェンダーは萎縮して小さく見え、フォワードは敵ディフェンダーを二人以上抜き去ることが許されず、折角の理想的チーム・カラーを戦績に活かすことができなかった。ベストは杉並区民大会での準優勝であったかと思う。

西高の伝統である猛練習には耐えた。特に、年々、鬼コーチ殿は現役時代に経験された、辛かった練習メニューを特に選りすぐり、量も上乘せして課されたものであるから、25期の我等の時には積年の厳しさがそれを越えてはならないピークに達しており、演技力のないメンバーは危うく脱落し、更に選手層を薄くしてしまうところであった。クリア力と忍耐力をつける“振り子”のメニューでは、本来、ボールを遠くサイドに蹴り出すべきところを、へばってくと臆臆とした頭にきて、球出しされるコーチ殿の顔を狙って力無くも蹴ったことを覚えている。ちなみに、当時のコーチ連は寺田先輩を将軍として、石川、望月および宇都宮、千田の各軍曹殿をはじめとした諸先輩方々であった。

我等が代で、厳密に記せば我等が世代でささやかながらも誇りに思うこともある。それは西高サッカー部初と推測する辣腕女性マネージャ（第27期、本橋嬢）を招いたことである。当時、キャプテンは硬派であったため、心の中では嬉々としながらもそのようなことに難を示したが、とにかく今では唯一誇りに思う。また、練習試合でも必ずポツン、ポツンと少なくとも二人の女生徒のサポーターがあったし、恒例であった富士高・学園祭での招待試合では、人数までは覚えていないが、列を成す立ち見女生徒の声援を受けた。その試合では見事に5対0で勝利したことは明確に記憶している。この辺は我等が一代前では決してなく、おそらく一代後、二代後のメンバーが寄与するところも多かったかと思うが、いかにチーム・カラーがスマートでもあったことか。

猛練習に必死な思いで堪え忍び、また勝算のない試合に敗れても、涙してその悔しさを次のステップへのバネとした精神力や体力を養ったこと、それにも増して故岡田先生やコーチを務めてくださった諸先輩方々を含めさせていただいて、都合五期に渡るチーム・メートを果たしたこと、これらはこれまでの40年を越す人生において掛け替えのない財産となっている。この財

産さえあれば、21世紀が日読みとなった先行きの見えない社会生活においても、情報化、合理化の波で人間味が薄れた会社生活においても、更には男女雇用均等法の影響で家事の負担増に悩む私生活においても、恐いものなど全く無い。

「花の26期再結成」

西高26期 南波佐間 浩

現役時代の対外試合数については、何試合したかは、記憶していませんが、当時は都内でも3位内の実力を誇っていた國學院久我山に2試合して、1勝1分けという記憶は鮮明に残っています。

私は、中学の時は都内でもサッカーの名門といわれた杉並区立の中瀬中学でやっていたことで、はっきり言って、進学校である西高サッカー部にはあまり期待していませんでしたが、入部してみると、大変いいメンバーが揃っていてビックリしたことを覚えています。

公式戦での結果には恵まれませんでしたが、当時のコーチからも都内ベスト8は狙えるチームとされていました。

2年前、同期の皆が40代になったこともあり、同期を中心にチームを再編成し、またサッカーを楽しんでおります。チーム名も「SHA49」（西高49年卒という意味）でシニアリーグ等に参加しております。

杉並のシニアリーグでは、いつも優勝候補の筆頭にあげられながら、準優勝2回と楽しみを後に残しております。昨年は、波崎のシニアカップにも参加しました。今年も参加予定です。

全員が攻撃的で（守りはきらい）、終わった後の一杯を楽しみにサッカーを楽しんでおります。40才以上の方の参加をお待ちしております。



1965年夏の合宿は西高グラウンドが使用できず杉並高校のグラウンドを借用した（18期橋本氏の記事参照）。

やってよかったマネージャー業

西高27期 本橋 信子

クラスメイトでジョージ・ベストが大好きな由比子さんに、「ねえモトハシ、サッカー部のマネージャーと一緒にやろうよ」と言われたのが高校1年の初夏。そしてプレーヤー兼マネージャーの敦郎さん（26期佐藤）にその旨を伝えると曰く「フーン、誰もやったこと無いよ」「……………」！。実際、仕事は練習試合の申し込みや怪我の手当てと、ハーフタイムに食すレモンのはちみつ漬けを作ることだったと思う。夏の合宿では、半分たんである布団をたたみ直し、ごきぶりの糞だらけの西高会館の畳を掃いた記憶はあるが、いつも半日で帰ってしまっていた。他部と違い、女子マネージャーという仕事のマニュアルもなく、詳しく説明されないのをよいことに、あれもこれもと気を利かして仕事を確立していかなかったため、とんでもない怠慢マネージャーになっていた。そこにはパイオニアの自覚など全く見られず、今思えば情けない限りです！ごめんなさい。

秋に入るとマネージャー業よりも気になることができた。いつも絶対に座らない高齢のシワちゃんの存在である。暑くても強風でもとにかく座らない。正直言って、後ろからワッといっておどかしたら、そのまま倒れてしまうに違いないと信じていたので、プレーしている選手よりもずっとずっと心配だった。どんなにおかけ下さいと勧めても、「いいんですよ、私は。本橋さんは座ってください」と言ってグラウンドへ目を戻すのが常だった。なんとも不思議なパワーで私たちは包まれていたように思う。

マネージャー業で印象に残っているのは、レモンの皮のワックスが嫌で皮がざらざらになるまでこすり落としたこと、中大小金井高校へ練習試合を申し込んだ時、NOと即答され、それを隣家に住む同校の化学の先生にいつけると、翌日「試合してください」と電話があったこと、そして、毛深過ぎる手足の怪我にテープを貼るとき、はがすときを想像していたことなどである。

最近、自宅近くのグラウンドで「SHA49」の試合がある時にはできるだけ応援にしている。なんとなくいい感じの四十代になった皆のプレーを見ると、それまでの生き方によって共有できる時間が作られていくんだなあとしみじみ思う。これからも、なんとなくいい感じの皆に会えたらいいなあ…。最後に、あんなに怠慢なマネージャーだったのにこうして仲間に加えて貰えて、後にも先にも西高サッカー部で一番しあわせなマネージャーだと公言しちゃう！！！！！！。



1年生時代の思い出

西高27期 八木 伊知郎

入学早々、同じ中学出身の友人達とサッカー部の部室の扉（何故かサッカー部の扉だけ26期の先輩作の絵が描かれていた）を叩き、一見怖そうだった先輩達（実は全くそうではなかったが…）に自己紹介して、やつと西高サッカー部員としての生活が始まった。

当初は、我も我もと毎年恒例の様に数多くの新人が押しかけ、あの西高会館での初めての暑い夏合宿には、30人近い仲間がいたように記憶している。たまたまその合宿はバレー部と一緒にあり、1階にバレー部、2階にサッカー部が寝泊まりしたのだが、我々は人数が多くて2階だけでは収まりきらず、1年生の一部は1階のバレー部の中に混ざって寝ることになってしまった。

合宿も終わりに近づき、疲れもピークになっていたある夜、バレー部の先輩OB達がほろ酔い気分(?)で1階の部屋に押し掛けてきて、後輩部員達に対して一言物申そうとした時、「あれっ！サッカー部がいるのか・・・?!それじゃあ、サッカー部は寝とけ！寝とけ！バレー部の奴だけはよく聞いとけ!!」とまずは挨拶。その後、延々と大きな声で暖かい激励の言葉を送っているその横では、とてもぐっすり寝ていられる雰囲気ではなかった。そんな厳しい環境と一緒に経験した連中も、合宿が終わると例年のように、1人減り2人減って、気が付くと14~15人になってしまっていた。

話はわかるが、当時のグラウンドは、大講堂を撤去し、その当時の体育館・プールが新設された直後であり、周辺は石ころだらけの状態、毎日、毎日グラウンドのトンボかけが日課となっていた。本来「トンボかけ」というと、練習で荒れたグラウンドを整地することを意味するが、この時はトンボに引っ掛かる石ころを掘り起こし、グラウンドを平らなきれいな状態にしていく「グラウンド作り」が主目的になっていた。そこで、ただ整備するだけではおもしろくないので、意地になって掘り起こした石の数を競ったり、「赤トンボ」と命名した柄が赤く塗られたトンボを取り合うために、用具倉庫までわざわざ練習の時以上に素早くダッシュしたりと、苦しいグラウンド整備の時間を楽しいひとときに変える努力(?)をしていたことも、懐かしく思い出される。

そんなグラウンドも、2年生の終わりから3年生の秋まで芝生を張る工事が行われ、赤トンボ時代とは見違える様な立派な姿に大変身した。但しその芝生も、3年生の秋に我慢しきれずにサッカーのクラスマッチをやってしまったためか、その美しかった緑色の絨毯が二度と見られなくなったのは、誰のせいなのかしら・・・?。

思い出

西高28期 加藤 就一

都立の芝生化実験校となったため、芝生化工事で一年弱、すぐはげてしまい再工事で半年と、一番かんじんな時にグラウンドが使えず、自主トレか練習試合しかできず、麻雀ばかりやってたな。おかげで一期下は都ベスト4や8になったのに、うちらは弱かったな。

その頃、帝京の次に強かった國學院久我山（ベスト4、2回くらい）と試合やって、1-1で引き分けたのが、一番記憶に残るかな。あと、四国から転勤で中3の時東京に来た者には、あの頃の光化学スモッグはきつかった。息が吸えなかった。

先日、西高へ行ったら、全校舎がたてかえられ、西高会館も小講堂も長屋も何もない。グラウンドの2Fだでの部室しかなかった。あと、グラウンドはあいかわらずひどいね。

怪我の功名?

西高28期 中井 康二

3年間、ほとんどさぼることなく、練習に参加しました。それでも、レギュラーでもなく、控え選手にさえなれなかったのが、西高サッカー部の栄光ある歴史に（そして、今はその記念誌に）何の貢献もできず、申しわけありません。

けれど、サッカー部が大好きでした。試合出場を期して、はりきって作った背番号20のユニフォームは、とうとう自分は着ないまま。後輩に着られっぱなしでしたが、決していじけることなく、最後の試合まで、サッカー部員として、懸命に活動した事は、自分の中では誇りに思えることです。そして、そういう部員の存在を受けとめてくれる懐の深さが、西高サッカー部にはありました。時折、あの頃を思い出します。

今は、中学教師、サッカー部顧問をしています。「好きなら、続けろよ」控え選手に、なんとなく優しい?私です。

残像

西高28期 萩野 新

1. 大島合宿：江ノ島を船で出航する時、「西高での合宿と違って、きつくても逃げられない!」と皆で話した。

大島は水不足で、体を洗う水道水を節約するため、練習後、海で土をおとしてから民宿の風呂にはいった。

2. 日常練習：山根邦明がもっぱら指導、今で言う自主性重視だった。

真剣に生きていた

西高29期 高原 明生

あの頃は真剣に生きていた。まるで息を吸うのも命懸けのようだった。だから、西高サッカー部でのことは鮮明に覚えている。

入部して、最初は教室で説明があった。教壇の席に座って話しをした山根という人が、非常に大きく見えた。態度が大きかったのかもしれない（山根さんすみません）。いや、すごくハンサムでかっこよく見えた。その翌日か翌々日、第一回目の練習で井の頭公園まで走った。いやー、スポーツって苦しいものだったのね。精神的な苦しみも、肉体的な苦しみには及ばない、今でも俺はそう信じている。この苦しみを毎日味わうのかと蒼ざめたが、なぜか井の頭公園までのランニングは二度となかった。

当時、吉村さんと斉藤さんという二人の3年生のほか、上級生は皆2年生だった。皆、信じられないほどまかした。山根、白岩、藤田、植田、松本、安藤、小笠原、加藤、近藤などなど（敬称略、名前が漏れた人、ごめんなさい）。一人一人はこんなにうまいのに、なぜ大会での試合に勝てないのか？ 下級生は首をかしげ、戦闘組織における統制、意志の統一、構成員の相互理解と相互尊重の重要性などを自然と学習した。我々が2年生になると、ミーティングで率直な批判と自己批判を繰り返した。まるで昔の中国共産党のようだった。

そして決定的に重要なのは指導者である。我々29期生は、ハリー石川という名コーチを得た（石川さんすみません、ハリー、ハリー、急げ急げと連呼されるので、密かに渾名がついていたのです）。校庭の芝生化も終わり、まともな練習が出来るようになった（だが夢のような芝生はすぐに禿げて空しく消えた）。ボンクラだった我々を勝たせてくれた石川さんには深く感謝している。都の準々決勝で帝京高校と2回連続して当たらなければ、我々は関東大会でもインターハイでも優勝していたかもしれないのだ。後に留学して、学問においても指導者が重要だと知ることになるが、それを初めて体感したのは西高サッカー部でのことだった。

校庭が使えなかったので、1年の時は寺田さんに富士見が丘のNHKグラウンドを使わせてもらったりしていたが、夏の合宿は大島の波浮港に行った。沼田さんのご親戚の旅館に泊めてもらった。食堂の壁をでっかい船虫が這っていた。俺は小学生の頃から修学旅行に行くときっぱり眠れないたちだった。大島でも同様で、すぐにへばった。2年の西高会館での合宿でも眠れなかった。しかし、この時は最終日の最終練習で身体に痺れが来るまで頑張れた。この違いは、ひとえに責任感の有る無しに由来した。自分がやらねばならないと覚悟を決めると、人は困難に前向きに立ち向かえることがわかった。

人はまた、意識下に潜在的な力を蓄えており、いざという時には、いや端的に言うとは異性の前では、それを爆発的に発揮しようということも体験した。夏の練習の最後にロング・ダッシュをしていた時のこと。下級生に範を垂れるという意識も既にあり、力の限りを尽くして走っていたつもりだった。そこにテニス部の女子が練習を始めようと現われた。さあ、皆の走る速

度の上がらないでか。自分の足も全く軽くなったのに驚愕した。弥永と同じように、あの時は俺の目つきも変わっていたことだろう。新たなる人間性の発見だった。

西高サッカー部では、人間の幸せについても教わった。まず単純なことから言えば、人間は歓喜の瞬間には自然に両手を空に突き上げる。つまり万歳をする。これは味方が得点をした時の自分や皆の様子からわかった。そして人間のしあわせの本質は他者との一体感にあるのではないかという認識。これは新人戦の3回戦に勝ち、その先の関東大会予選に駒を進めた時に芽生えた。その時は団体競技の素晴らしさを満喫した。

小雨の残る、ぬかるみの中の試合だった。PKを得て、俺が蹴ったのだが、（いつものサイドキックではなく）「インステップで蹴れー！」というベンチの石川さんの指示が聞こえた。しかし濡れたボールの重たさ加減は現場の者にしかわからない。飯島が「蹴りたいように蹴った方がいい」と声をかけた。俺もそのつもりだった。いつもと同じ様に右側へ蹴ったボールはゴールのサイドネットを揺らした。気合が入り過ぎて思わず「ナイスシュート！」と叫んでいたらしい。俺に抱きついた長門に「おまえ自分で言うことはないだろー」と笑われたのが照れ臭かった。

失敗から学んだことももちろんある。最後の大会での最後のPKはずしてしまった。俺はPKを得た相手の反則をセンターバックの位置から見ていたのだが、実はペナルティーエリア内での反則には見えなかった。要するにボーっとしていたわけだ。だから、いきなりPKだと言われてビックリしてしまった。あの時は、不意を突かれて平常心を失うと人間はへまをするものだという教訓を得た。

なんだか妙な学習体験もある。私立武蔵高校の学園祭に呼ばれて試合をした時、相手のフェールに対して「バカヤロオ！」と思いきりドスをきかせて怒鳴ってしまった。当時の俺は何を隠そうコワモテ路線を慕進していたので、相手は大いに恐縮した。その時には胸を衝かれる思いがした。学園祭に招かれて来た客が、些細なことで相手を怒鳴り上げて何をやっているのか。それから俺はあまり人を怒鳴らなくなった（そうだよねー、下級生諸君）。

しかし、一番多くのことを教えてくれたのはシワちゃんだった。「高原くん、ボクの授業で何か悪いところはありますか？」学校でこんなことを聞く先生に会ったことがなかった。「高原くん、試験のために勉強してはいけませんよ。」こう言われた時には心の迷いを見透かされた思いだった。「人生の苦しみに比べれば、シートベルトが少々きついてもなんてことはありません。」大学に入ってからコンサートにお供した際、冗談めかしてそうおっしゃったのは虚を衝かれた。俺がイギリスへ留学に出てからも、「ジョン・ブル魂」に言及し、「激しく勉強に取り組まれていることと存じます」と書かれた励ましのお便りを幾通も下さった。岡田先生。先生のことを思い出し、教員になった我が身を省みては恥ずかしく思うことばかりです。先生の謙虚さと、生徒を思う心情の強さをいつの日か身につけるべく、私も精進を重ねてゆきたいと思います。

大島合宿のことなど

西高29期 野崎 知

平成9年に西高サッカー部は50周年を迎えたとのこと、またこのたび記念誌を作成することになったということで、OBの一人として大変うれしく思っています。現在男の子3人の父親ですが、上の二人は少年サッカーチームに所属している関係で時々練習の手伝いをしており、また今年ワールドカップに日本が初出場したこともあって、私の中でサッカーへの情熱が近年になく高まっております。そんな折り、50年誌の原稿の依頼を受け、久しぶりに高校時代のことを思い出しました。ぜひ大島合宿のことを書いて欲しいとのことですので、記憶を辿りつつ、懐かしい思い出を綴ってみたいと思います。何分昔のことですので、記憶も曖昧であり、事実と違う部分もあるかも知れませんが、予めご了承くださいと思います。

私が西高に入学したのは昭和49年で、大島の夏合宿があったのは1年生の時ですから、かれこれ24年前になります。ちなみにサッカー部には3年生の夏まで所属しておりました。私が入学した当時は、都立高のグラウンドに芝生を張る計画が進んでおり、西高もその真最中でした。従ってグラウンドは使えず、練習はもっぱらNHKグラウンドや今はロイヤルホストになっていますが、正門の横の第2グラウンドともいべき場所で行っていました。そんな関係で、夏合宿も西高会館ではなく、外で行うことになり、大島が合宿地に選ばれました。

大島にはフェリーで渡ったのですが、どこから乗ったのか覚えておりません。おそらく竹芝桟橋から乗ったのだと思いますが、新宿駅に集合して小田急線に乗った？記憶もあり、まったくあやふやです。ただ、フェリーの中では、2年生を中心に「土瓶、茶瓶、禿げちゃびん」というゲームをやり、大いに盛り上がったことをよく覚えています。さて参加メンバーですが、顧問の故岡田先生と釣りきち三平こと山本先生。そしてコーチとして、宇都宮さんや千田さん等OBの方が4名程こられたと思います。3年生は2人残っており、2年生が15名程、また1年生は当時の写真を見ると11名ですから、参加者は総勢34名程だったのではないかと思います。女子マネージャーの方も来られたのか、全く覚えておりません。合宿地は、大島岡田港からさらにバスに乗って波浮港まで行きました。宿舎は、2年でゴールキーパーをやられていた沼田さんの親戚の旅館をお借りしました。

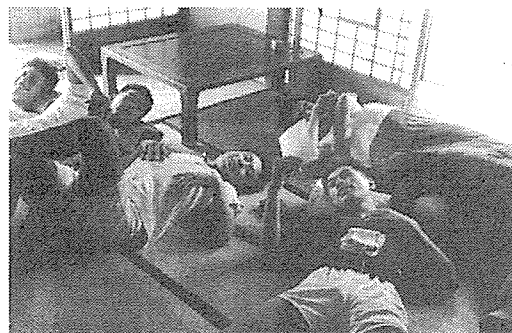
着いた日の午後から早速練習でしたが、場所は近くの小学校か中学校のグラウンドを借りており、砂埃が凄かったのを覚えています。私は高校に入ってからサッカーを本格的にやり始めたため、合宿などももちろん初めて、さらには試合をまともにしたのもこの大島合宿が初めてということで、そういう意味では記念すべき場所でありました。7月だったのか、8月だったのかも覚えておりませんが、とにかく暑かったのは確かです。毎日午後になると降るスコールのようなわか雨が待ち遠しい限りでした。私はまだ1年生でしたので、上級生がフォーメーション等の練習を行う時は、もっぱら球拾いでしたが、熱さと練習でくたくたになっていましたのでこの時ばかりはそれが楽しみでありました。特にゴール裏には木が生い茂っており、少し

は涼しかったと思います。

合宿は5日ぐらいだったかと思いますが、練習は厳しく、暑さも手伝って、若い高校生にとってもつらいものでした。小学生の息子が所属する、サッカーチームの練習の手伝いに行くだけで疲れてしまう今の私を考えると、当時は体力があったものだと思います。三日目ぐらいになると、バスに乗って帰るのが待ち遠しかったりしましたが、中には、眠くて集中力がないので、半日練習を休みたいとOBに直訴したつわものがありました（名前は出しませんが、1年生の豪傑です）。そんな中で楽しみといえば、練習後の銭湯とその帰りに飲む冷たいドリンクでした。宿舎の近くに銭湯があり、練習が終わると大挙して押しかけました。汚い足をよく洗わないまま行く人が多かったので、脱衣場の床はザラザラ。風呂屋のおやじによく怒られなかったと思います。そして風呂上りに飲む、冷たいビールならぬ、島で絞られた牛乳。これが驚くほどおいしかったのを覚えています。

さて大島合宿で鍛えられた1年生は、そのお陰で、3年の春に関東大会及び夏のインターハイの東京都予選でベスト8まで勝ち進むことができました。2度とも帝京高校に破れましたが、今も青春のよき思い出になっています。残念なのは、私を含めて3年生全員が夏に引退したため、冬の全国大会の予選に出られなかったことです。受験のために引退したのですが、私は結局一年浪人することになりました。長い人生の中で、一年の浪人など高が知れたこと。あの時何故続けなかったのか、今も思い出すたびに、悔しい思いをします。冒頭でも述べましたが、私が本格的にサッカーを始めたのは西高の時でした。サッカーのすばらしさを教えてもらったのも、その時です。そういう意味で、大げさにいえば、西高サッカー部が私のサッカーの原点になっています。従って、西高サッカー部には感謝の気持ちでいっぱいです。

取りとめもないことを書いてまいりましたが、大島合宿に参加された方々が当時の記憶を辿る一助になれば幸いです。50年の歴史を造ってこられた先輩諸氏に敬意を表し、又、現役諸君に夢を託して筆を置くことにしたいと思います。



▲1957年8月13日～新鹿沢温泉での合宿。宿舎鹿鳴館は古びた宿ではあったが畳の上での生活であった。

1956年3月24日～の合宿。宿泊は西高の旧食堂。床にマットを敷きその上にゴザという生活だった。



一冊のコピーから、つれづれなるままに

西高30期 石橋 亮

本棚の片隅に、一冊のクオートの青いファイルが立てかかっている。1977年1月号のサッカーマガジンである。それもなぜか現物ではなくて、表紙からグラビア、記事にいたるまでのかなりの枚数のコピーなのだ。

表紙は、当時飛ぶ鳥を落とす勢いでスターダムにのし上がっていったジーコだ。フラメンゴの伝統のユニフォームに汗を滴らせて、ラジオ局のインタビューに答えている写真だ（リベルタドーレス杯に優勝したときのものか）。

中のグラビアでは、初の首都圏開催になった高校選手権決勝の様子が報じられている。名勝負といわれた、静岡学園（初出場）対浦和南（名門）の試合だ。結果は、ボウズ頭の1年生水沼貴史が活躍した浦和南が、5-4で接戦をものにして優勝した。

私の手元にこのコピーがあるのは、国立競技場に仲間と一緒にこの試合を観に行った記念に、というわけではない。そのコピーをずっと後ろの方へページをめくってみると、「高校サッカーめぐり 東京編」という特集記事がでてくる。そこでは、早稲田、金子、宮内、高橋などの2年生を主体としたチームで、今でも歴代の同校のチームと比べても最強といわれている（少なくとも私にはそう見える）、帝京高校を筆頭に、本郷高校などの当時の強豪校が紹介されている。

そしてそれらの高校がしっかり1ページを割いて、しかも写真付きで紹介されている片隅に、都立西高が小さく紹介されているのである。曰く、堅い守備からのカウンターでウィングのオープン攻撃（こりゃ死語だぜ）から得点をあげるパターンのチームで、チームワークの良さがセールスポイントだ、と。まあ、言ってみればどこにでもあるチームなのだ。

そこで紹介されている私たちのチームは、前年度のチーム（つまり私たちの1学年上級のチーム）の実績（東京都ベスト8）に上積みする形で、件の選手権の東京都予選（当時は東京からは1チーム）で、ベスト4まで行ってしまったのである。そこで石神井高校とともに両校が表彰されたわけだが、そのご褒美にサッカーマガジン登場となったのである。ちなみに準決勝では、本郷高校に0-2で敗れた。

私たちの代のメンバーは、少人数だったせいもあって確かにチームワークは良かったように思う。それとみんな人が良かったので、わがままな「ワンマン」という男はいなかった。こういう人がいなかったから、全国大会に行けなかったという説もある。いずれにしても、そのことが良い悪いというのではない。とにかく、そういう個性のチームだった。

こうやって書いてくると、一人一人を思い出してみたくなった。「玉村清秀」キャプテン。ボールリフティングは20回程度のテクニックだったが、人に対してめっぽう強かった。足もチーム一早かった（長距離はダメ）。スウィーパー。「安秀和」ライトバック。今だったらウイングバックのような役割ができたと思う。足が速か

ったから。今の髪型からは想像もつかないヘアスタイルだった。

「大沢良」ストッパー。グラウンドに転がっていたビニール袋を思いきり蹴飛ばしたら、中に大きな石が入っていて、右足甲を傷めてしまったお茶目な奴。

エース殺し（だったかな）。

「新村真人」レフトバック。なんだか知らないけど、一人でハイテンションになっていた奴。スライディングタックルは深く鋭い。でもPKプレゼンター。

「飯倉邦朗」FBまたはHB。最も練習態度が良かった奴。まじめな性格で、みんなから頼りにされていた、サッカー部の良心。母とも言うかな。

今でもOB会の常任理事として活躍中。

「桑原俊彦」HB。スタミナは内藤とチーム一、二を争っていた。1年生の頃は続かないと思ったほど華奢な体格だったが、人は見かけによらぬもの。

「内藤覚」センターハーフ。いわゆるゲームメーカー。基礎技術はチームで一番。私に対して一番やかましかった奴。でも頼りになった。

「上杉健太郎」HB。スタミナを兼ね備えたテクニシャン。スルーパスをよくもらった記憶がある。ダッシュターンが弱点。

「石橋亮」私だ。ポジションはセンターフォワード。一応ゴールゲッターだった。ヘディングが得意だったようだ。ポストプレイヤータイプではなく両サイドに動いてボールを受けるタイプだった。こういうのを今は、ムービング・ストライカーというのだそうだ。気持ちがのらないと試合中よくさぼっていたらしい。

それから、両ウイングとゴールキーパーは私たちの一級下の、鐘ヶ江君、石黒君、小松君がつとめていた。彼らはとてもいいプレーをしたと思う。特にゴールキーパーの小松君は高校に入ってからサッカーを始めたはずだが、1年経ったらもうPKストッパーに成長していた。なんだか頼りなさそうな、ホントにベスト4かいな、という雰囲気聞こえるが、みんなまじめで一生懸命だった。それを支えていたのは、コーチの「石川健次」さんだった。3年先輩だったと思う。当時千葉大に通われていたはずで、でも毎日3時半頃になると必ずグラウンドに姿があって、今考えると、いつ大学に行っていたんだろうかと心配になる。よくまあ、高校生なんていう面倒くさい年頃を指導したと思う。私たちもかわいいもんで、石川さんに反発することなくついていった。

とにかく思い出は尽きないのだ。書き始めるとテーマも脚色もあったものではない。支離滅裂をお許し願いたい。

私は、卒業後大学へ行って同好会に入り、会社に入ってサッカー部を作った。会社を辞めたあとは住まいの近くのおじさんサッカー倶楽部に混ぜてもらって、40に手が届こうというのにいまだにサッカーをやっている。今でもうまくなりたと思っている。身体は言うことを聞かないのだが、頭だけでもサッカーは楽しい、とこの頃思う。この思いこみが長く続けるコツかなと思ってしまう。

誘われれば知らないチームにもすぐ入っていける。サッカー雑誌だって読んでる。Jリーグも観に行くし、日本代表を心から応援している。死ぬまでボールを蹴っているだろうと確信

している。

こんな私を認めてくれている家族にはとても感謝している。そしてこれだけサッカーを好きでいられるのも、西高時代のチームメイトと石川さんをはじめとする先輩たちとプレーした、あのサッカーがあるからだと思う。

21年ぶりにみんなに「ありがとう」と言いたい。最初はこんな照れくさいこと書くつもりはなかったのだが、書いているうちにそんな気分になってしまった。そして、「ありがとう」というためにも、みんなで集まってサッカーをしたいなと思う。

ところで、冒頭のサッカーマガジンの現物ですが、持っている人いませんかね。

元旦に思う

西高31期 鐘ヶ江 宗人

毎年元旦、我々31期の仲間は皆で会う。年に一度ではあるが、卒業して以来20年、毎年欠かすことなく、酒を酌み交わしている。そろそろ頭の危ない奴、高校の時からあまり変わらない奴、独身をかたくなに守っている奴、再婚後すぐに子宝に恵まれた奴、人それぞれであるが、毎日汗と泥にまみれ、一つのボールを追いかけていた高校時代を肴に、思い出話に花が咲く。

思えば、我々31期は、強くもなく弱くもなく都立高校の平均的なチームであった。ただ29期・30期の先輩のチームが大変強く、都大会でベスト8、ベスト4等の輝かしい成績を残していたため、帝京等をはじめとする私立の有力校と対戦する機会が多く、公式戦・練習試合共、レベルの高い充実した高校のサッカー生活を送らせてもらったように思う。練習は28期の山根先輩のご指導の下、伝説の「山根スライ」等、体もスパイクもぼろぼろになるまで練習した記憶がある。

卒業後も今日まで多少の中断はあったものの、大学・社会人とサッカーは続けている。大学時代は1年間ではあるが、西高の後輩の指導をさせてもらったり、同期の別の大学へ行った仲間と対戦したりした。現在も会社のサッカー部に所属しており、主に東京都3部リーグ、損害保険リーグ等でプレーしているが、西高サッカー部の先輩・後輩と対戦する機会も結構あったかと思う。今年は6月に試合中足首を骨折し、今はリハビリ中で、年齢的にもそろそろ引退の危機となっている。しかし、高校時代あれだけサッカーに熱中していたことを考えると、やはり来シーズンもう一度グラウンドに復帰したいという気持ちが強い。

西高サッカー部の先輩・後輩の皆様、31期は皆元気にやっております。試合等で顔を合わせるがありましたら、是非お手やわらかにお願い致します。



西高サッカー部の思い出

西高32期 小山 馨

西高時代の思い出といえば、目に浮かぶのはほとんどグラウンドのシーンです。春先の土ほこり、炎天下の合宿。授業中はサッカーの練習に備えて休養に努め、たまに外を眺めては「雨降らないかな」などと考えておりました。頭を使うことといえば、ヘディングを置いて外に何もありませんでした。

大林君が決定的なシュートを外したシーン（記念祭対富士高戦）、残り5分間に3点取って逆転した時の宮永君のボレーシュート（対三鷹高？戦）、ボックス三苦君のロングシュート（早学グラウンド？）など、はっきり覚えています。もちろん、練習中のこともたくさん。「山根スライ」なんて練習方法もありました。玉村先輩の「しまってほい」、茂呂先輩の「おーい」など、懐かしい限りです。

私は体力的にも技術的にも皆さんに付いていくのが精一杯でしたが、尊敬できる先輩、仲間がいたからこそ何とか頑張ることができました。西高サッカー部でプレーさせて頂いたということが、プライドとなって今の私を支えてくれています。



1963年元旦の蹴り初め記念撮影。現役も加わり集まる人数もこんなに多くなった。

夏合宿の思い出

西高33期 高橋 泰彦

夏の合宿といえば、「個性あふれるOBの名前が冠せられた『山根スライ』『玉村ジャンプヘッド』等の厳しい練習」、「6日間で穴のあいてしまう運動靴（当時、スパイクは練習試合のときだけ、履いていたように記憶しています）」、「ハンバーグと呼ばれていた太腿の大きな擦り傷」、「練習前のスプリンクラーでの水撒き」、そして、「自動車の音でうるさい真夏の柔道場の夜」、こんな事が思い出され、今となってはとても楽しい思い出です。

当時はすでに退職されていましたが、岡田先生（しわちゃん）には大変お世話になりました。

（これは、東 正之、阿部 純一、中村 宗太と私の合作です）